

陳暘易訓義校釈(二)

児玉憲明

樂書卷第八十三^a

周易訓義^b

坎 離 萃 升 既濟 繫辭

坎

坎 ䷜ 坎上坎下^c

六四樽酒簋貳、用缶、納約自牖。象曰樽酒簋

貳剛柔際也。

酒所以養陽而其器爲樽、食所以養陰而其器爲簋。樽則其體外員、陽類也、故其數奇。簋則其體內方、陰類也、故其數偶。樽酒簋貳、禮之至薄者也。用缶、樂之至質者也。六四以柔正而無應乎陽^d、九五以剛正而無應乎陰。當坎之時、能免乎險者、惟剛柔各得其正者能之。以正而相與、以近而相得、行至薄之禮、用至質之樂、其誠有不足以相際乎。禮曰、古之人不必親相與言、以禮樂相示而已、比之謂也。魯頌以于胥樂兮爲君臣有道之頌、孟子以徵招角招爲君臣相悅之樂。蓋本諸此。然人之相與、以誠則約、以僞則費。納約者致其誠之謂也。室之有牖、則幽明通剛柔相濟之意也。蓋相際者禮也、相接者恩也。君臣之間、恩不隆於禮、故坎言剛柔際。父子之間、禮不隆於恩、故蒙言剛柔接。然解之初六言剛柔之際與坎異者、坎之六四九五以近相與、不必

有所之、故言剛柔際。解之初六九四以遠相與、不能無所之、故言剛柔之際。

〔校勘〕

a 「樂書卷第八十三」 四庫全書本は「樂書卷八十三」に作る。

また四庫全書本にはこの行の前に「欽定四庫全書」の一行がある。

b 「周易訓義」 四庫全書本は、「樂書卷八十三」と「周易訓義」の間に「宋陳暘撰」の一行がある。方濬師本には「宋宣

德郎秘書省正字陳暘撰」の一行がある。なお、「周易訓義」を卷八十二は「易訓義」に作る（諸本同じ）。

c 「坎上坎下」 方濬師本に四字無し。

d 「無應乎陽」 国会図書館蔵宋刊本「无應乎陽」に、方濬師本「氣應乎陽」に、それぞれ作る。

e 「剛柔之際」 国会図書館蔵宋刊本「剛柔之際之」に、四庫全書本「剛柔之際也」に、それぞれ作る。

〔訳〕

坎 ䷜ 坎上 六四、樽酒簋貳、缶を用ふ。約を納るるに牖より

す。象に曰く、樽酒簋貳は、剛柔際するなり、と。

酒は陽気を養うものであり、その容器は樽である。食は陰気を養うものであり、その容器は簋である。樽は、その形状が丸くなつており、陽に属する。ゆえにその数は奇数である。簋は、その形状が内が方形であり、陰に属する。ゆえにその数は偶数である。³「一樽の酒と二簋の食」は礼のきわめて簡素なものである。「缶⁴を用ふ」は楽のきわめて質素なものである。

〈六四〉は柔の性質をもつて正しい場所⁵にあり、陽に應じることはない。〈九五〉は剛の性質をもつて正しい場所⁶にあり、陰に應じることはない。坎の時に当たつて危険を避けることができるのは、剛と柔がそれぞれ正しい地位を得るからである。⁷正しい地位で交わり、近くにおいて心が通じ、きわめて簡素な礼をおこない、きわめて質素な楽を用いるなら、その誠意は接近するまでもない。礼に「昔の人は、必ずしも直接に親しく語り合うことはせず、礼楽によつて互いに心の内を示した⁸」とあるのがそういうことである。「魯頌」が「ここにあひ樂しむ」を君臣の間に道義がある頌歌とし、孟子が「徵招」「角招」を君臣が喜びあう樂としたのは、この考えにもとづくのであろう。しかしながら、人が交際する時、真心によるなら儉約で、偽りによるなら贅沢になる。「約を納るる」とは誠実を尽くすことを言うのである。部屋に窓があるのは、幽と明を通じ剛と柔が助けあうことである。「際する」のは礼法で、「接する」のは恩愛である。君臣の間では、恩愛が礼法を超えることはない。それゆえ「坎」卦では「剛柔際す」と言うのである。父子の間では礼法が恩愛を超えることはない。それゆえ「蒙」卦では「剛柔接す¹¹」と言うのである。

ところで「解」の〈初六〉には「剛柔は（ゆきて）際す¹²」と

ある。「坎」と異なる理由はこうである。「坎」の〈六四〉と〈九五〉は至近にあつて親しくするので他所に行く必要はない。ゆえに「剛柔際す」と言う。「解」の〈初六〉と〈九四〉は遠く離れて親しくするので、出かけて行かねばならない。ゆえに「剛柔は（ゆきて）際す」と言うのである。

〔注〕

1 『禮記』（郊特牲）の「凡飲養陽氣也、凡食養陰氣也（酒は陽気を養うもので、食事は陰気を養うもの）」による。『樂書』卷第八十二（周易訓義・需）にもこれにもとづく類句が見える。

2 簋は黍稷を盛る礼器。黍稷を収納する部分が方形にくり抜かれている（『新定三禮圖』十三「鼎俎圖」）。

3 爻辞に「簋貳（簋はふたつ）」とあるのによる。

4 「缶」は素焼きの盆。『樂書』卷第一百十五（樂圖論・雅部・八音・土之屬）に「古缶」が見え、「昔は盎を缶と呼んだ。缶の器物としてのありようは、内部が空洞でものを収容することができ、外形は円筒で音を出すことができる。〈中声〉はここから発する（古者、盎謂之缶、則缶之爲器、中虚而善容、外員而善應、中聲之所自出者也）」とある。

5 「柔を以て正」とは、陰爻で偶數位（第四爻）にあることであらうか。

6 「剛を以て正」とは、陽爻で奇數位（第五爻）にあることであらうか。

7 「坎」は「險」に通じ、艱難に瀕した卦である。〈初六〉爻辞には「凶」、〈九二〉爻辞には「小得（少しく得）」、〈六三〉爻辞には「勿用（用ふるなかれ）」、〈上六〉爻辞には「凶」と

ある。対照的に〈六四〉〈九五〉の爻辞には「无咎」とある。

- 8 『禮記』（仲尼燕居）による。賓客をもてなす儀礼を述べて「是故古之君子、不必親相與言也、以禮樂相示而已（昔の君子は、必ずしも直接に言葉を交わさず、礼樂によつて互いの誠意を示した）」とある。

- 9 『詩』（魯頌・有駟）の句「于胥樂兮」による。「詩序」はこの詩を「僖公のときに君臣に道義があつたことを讃えた（頌僖公君臣之有道也）」とする。

- 10 『孟子』（梁惠王章句下）による。『樂書』卷第九十二（孟子訓義）を参照。

- 11 『周易』「蒙」卦の〈九二〉の「象傳」に「子が家をうまくまとめるとは、父と子が気持ちを通じること（子克家、剛柔接也）」とある。

- 12 『周易』「解」の〈初六〉の「象傳」による。「剛柔が（相手のところに）行つて交際するので、義として咎はない（剛柔之際、義无咎也）」とある。「剛柔之際」は「剛柔の際」と読まれるのが一般だが、陳陽は「ゆく」と、動詞として読んでいるようである。

離

離 ䷝ 離上離下

九三、日昃之離、不鼓缶而歌、則大耋之嗟、凶。象曰、日昃之離、何可久也。

徒鼓鐘謂之修、徒鼓磬謂之褻。所以鼓祝謂之止、所以鼓故謂之箠。以至彈琴謂之鼓琴、鏗瑟謂之鼓瑟、吹笙謂之鼓簧。然則

擊缶謂之鼓缶、不亦宜乎。

六二陰也、缶象也。九三陽也、其用動以吐歌象也。九三以炎上之性履過中之位、不能反炎上之性、鼓六二之缶以歌樂、則大耋之嗟不期至而自至矣。其能久而無凶乎。詩曰、今我不樂逝者其耄、此之謂也。

比之初六、坎之六四、離之六二^a、皆陰爻、其取缶象一也。然比取其情以樂者樂此故也。坎取其聲以坎、其擊缶故也。離取其象以離、虛中善應故也。

〔校勘〕

a 「六二」方濬師本「六三」に作る。

〔訳〕

離 ䷝（離上離下）九三、日かたむくの離、缶を鼓して歌はざれば、則ち大耋の嗟あり、凶、と。象に曰く、日かたむくの離、何ぞ久しかる可けんや、と。

鐘だけを打つ（鼓す）ことを「修」といい、磬だけを打つ（鼓す）ことを「褻」という。祝を鳴らす（鼓する）道具を「止」といい、故を鳴らす（鼓する）道具を「箠」という。さらに琴を弾くことを「鼓す」といい、瑟を奏することを「鼓す」といい、笙を吹くことを「鼓す」という。そうであれば缶を打つことを「缶を鼓す」というのも当然ではないか。

〈六二〉の陰爻は缶の象である。〈九三〉の陽爻は、その用途として動いて歌うことの象である。〈九三〉は炎上の性質をもつていながら「中」を過ぎた位置にある。炎上の性質に立ち返つて〈六二〉の缶を打つて歌わなければ、老境の悲嘆が到来すること

は、予期しなくともおのずと到来する。長らえて凶をのがれることなどできようか。『詩』に「今われ樂しまざれば逝きてそれ耄³」とあるのはこのことであろう。

「比」の〈初六〉、「坎」の〈六四〉、「離」の〈六二〉はすべて陰爻で「缶」の象徴とする点で共通する。しかしながら「比」は心情の「音楽は樂しむこと」⁵にもとづいたものであり、「坎」はその音の「坎として其れ缶を撃つ」⁶にもとづいたものであり、「離」はその形状の「離は中を虚にして善く応ず」⁷にもとづいたのである。

〔注〕

1 「鐘だけを打つ」以下、『爾雅』（釋樂）による。「訓義」の引用は現行本『爾雅』に同じ。

2 「中」は太陽の南中の意。〈六二〉の陰爻が「中」で、第三爻はそれを過ぎて太陽が下降に移った時間帯とみなす考え方である。類似の解釈が、たとえば楊簡にある。「この爻も〈離〉を日月の象とすることによる。太陽が真南を過ぎればかたむく。第二爻は南中で、第三爻は南中を過ぎたことである。〈日かたむくの離〉は、老いんとすることの象である。衰えれば老い、老いば死ぬが、いずれも同じ人間である。人の誕生は太陽が東から登るようなもの。壮年期は太陽が南にあるようなもの。衰えは太陽がかたむくようなもの。死は太陽が西に没するようなもの。太陽に東西出没の違いはあるが、その光は同じである（此爻又取離爲日月之象。日過中則昃。二爲中、三爲過中。日昃之離、將老之象。衰則老、老則死、一也。人之生如日之東升、壯如日之中天、衰如日之昃、死如日之西入。日有東西出入之異、其光明一也）」とある（『楊氏易傳』卷

十）。

3 『詩』（唐風・蟋蟀）に「今我不樂日月其除」「今我不樂日月其邁」「今我不樂日月其愒」の句があり、また『詩』（秦風・車鄰）には「今者不樂逝者其耄」の句がある。ここは文脈から推して「車鄰」を引いたものと考えられるが、類似した「蟋蟀」によつて「者」を「我」に誤つて引いたのであろうか。

4 「比」は卷八十二に既出。「坎」は卷八十三に既出。

5 『禮記』（樂記）の「音楽とは樂しむことである（樂者樂也）」、『易』（雜卦傳）の「比卦は樂しむことで、師卦は憂えること（比樂、師憂）」による（卷八十二の「比」の条に既出）。

6 『詩』（陳風・宛丘）による。「坎」は鼓や缶を打つ擬声語である。「毛傳」に「坎坎、擊鼓聲（カンカンは鼓を打つ音）」とある。

7 「比」の「訓義」に「缶」の器物としての様態は、内が空洞で物が入り、外は円形で「叩くと」よく鳴り、土の音が出る（缶之爲器、内虚以容、外圓以應、土音出焉）」とある（卷八十二「訓義」を参照）。字句がやや異なるが同じ主旨であろう。また卷八十三「坎」の条の注4も参照。

萃

萃 ䷬ 坤下兌上 象曰、澤上於地萃。六二、引吉、無咎、孚乃利用禴。象曰、引吉、無咎、中未變也。

升

升 ䷭ 巽下坤上 象曰、地中生木升。九二、孚乃利用禴、無咎。象曰、九二之孚、有喜也。

既濟

既濟 ䷾ 離下坎上 象曰、水在火上既濟。九五、東鄰殺牛、不如西鄰之禴祭、實受其福。象曰、東鄰殺牛、不如西鄰之時也。實受其福、吉大來也。

天地之間、凡負陰抱陽而生者、莫不具剛柔之性。盡柔之性而有孚者、萃之六二也。盡剛之性而有孚者、升之九二也。然孚者、誠之至誠者、性之德。萃不以孚則其聚易散、升不以孚則其升易困。詎能無咎乎。且陽道常饒、饒則豐、陰道常乏、乏則約。六二以陰居陰、九二以陽居陰。其爲物則約而非豐、其爲禮則不隆、於樂用禴之象也。古之人致孝乎鬼神、以誠不以物。雖澗溪沼沚之毛、蘋蘩藇藻之菜、猶可以薦之。況事上乎。然則君臣相與顧、豈以位之上下爲間哉。亦在夫誠而已。此六二以柔中而順乎上、九二以剛中而巽乎上。所以皆盡孚、乃利用禴之道也。時以用禴爲利、則不用禴、能無害乎。

以禮推之、夏商之時、春祭曰禘、夏祭曰禘、秋祭曰嘗、冬祭曰烝。天子禘祫、祫禘、祫嘗、祫烝。諸侯、祫則不禘、禘則不嘗、嘗則不烝、烝則不祫。至周則春祠夏禴秋嘗冬烝、以享先王。周雅亦曰、禴祠烝嘗于公先王。是易興於殷之末世、周之盛德、故祭多以禴爲言、則禘禴之祭一也。以飲爲主、故稱禘。以樂爲主、故稱禴。則飲必有樂、先王之禮也。郊特牲曰、饗禘有樂而食嘗無樂、飲養陽氣也、故有樂、食養陰氣也、故無聲。以飲爲主、則用樂可知矣。

樂以中聲爲本、而三孔之籥、先王所以通中聲也。凡聲皆陽也。故萃、升、既濟、皆於中爻言之。然萃之陽資乎五、升之陽資乎二、無適而非材也。萃之六二陰也、必待九五之陽引之、然後用禴。升之九二陽也、不待六五之陰引之、然後用焉。故升之九二、

以用禴爲先。異乎萃之六二序於引吉之後也。既濟九五東鄰殺牛不如西鄰之禴祭、則禴祭主六二言之、與萃六二同意。然既濟禴祭則用儉以持盈。是有大而能謙必豫、可以用樂之時也。成王以鳧鷖持盈、而有假樂之嘉者、以此。

〔校勘〕

- a 「蘊藻」 四庫全書本、方濬師本は「蘊藻」に作る。現行本『春秋左氏傳』（阮元注疏本）は「蘊藻」に作る。
- b 「周雅」 方濬師本は「小雅」に作る。
- c 「資乎二」 底本および四庫全書本は「資乎巳」に作る。樓鑰『樂書正誤』は、「巳」を「二」の誤りとする。方濬師本は「資乎二」に作る。

〔訳〕

萃 ䷬ (坤下兌上) 象に曰く、沢の地に上るは萃、と。六二に、引けば吉にして咎なし。孚なれば乃ち禴を用ふるに利あり。象に曰く、引けば吉にして咎なしとは、中の未だ変ぜざればなり、と。升 ䷭ (巽下坤上) 象に曰く、地中に木を生ずるは升、と。九二に、孚なれば乃ち禴を用ふるに利ありて咎なし。象に曰く、九二の孚とは、喜びあるなり、と。

既濟 ䷾ (離下坎上) 象に曰く、水の火の上に在るは既濟、と。九五に、東鄰の牛を殺すは、西鄰の禴祭してまことに其の福を受けるにしかず。象に曰く、東鄰の牛を殺すは、西鄰の時なるにかざるなり。まことに其の福を受くとは、吉の大いに來たるなり、と。

天地の間においては、陰を負い陽を抱いて生を受けたもので

剛と柔の性を持たぬものはない。柔の性を十全に發揮して「孚（まこと）」があるのが「萃」の〈六二〉である。剛の性を十全に發揮して「孚」があるのが「升」の〈九二〉である。しかしながら「孚」とは「誠」の中の最高に「誠」なるものであり「性の徳」である。²「萃（あつまる）」が「孚」によらなければ、集まったものもたやすく散逸するし、「升（のぼる）」が「孚」によらなければ、成長したものも行き詰まる。どうして災厄なしでいられようか。さらに、陽の道は常に余裕があり、余裕があれば豊かである。陰の道は常に不足しており、不足すれば質素である。「萃」の〈六二〉は陰として陰の位置にあり、「升」の〈九二〉は陽として陰の位置にある。物としてのありかたは質素であり豊かではなく、礼のありかたとしては豪勢ではなく、音楽としては禴を使うことの象である。古代の人が心から祖霊に孝心を尽くすには、誠意によってそれをおこなったのであり、物に頼ることはなかった。たとえ谷間や沼地に生える草、またデンジソウ、シロヨモギ、キンギョモなどでも、お供えできるのである。³上位者に仕えるならなおさらのことである。そうであるなら、君臣が互いに気を使えば、地位の上下のために隔たることがあろうか。「誠」が肝腎である。「萃」卦の〈六二〉は柔の中央にあつて上位者に従っている。「升」卦の〈九二〉は剛の中央にあつて上位者にへりくだっている。完全に誠を尽くすありかたで、禴を使う道である。この時、禴を使うことが利であるから、禴を使わなければ害がないわけではない。

礼によって考えるなら、夏・商の時は春祭が「禘」、夏祭が「禘」、秋祭が「嘗」、冬祭が「蒸」である。天子は禘では「祖廟を」、個別に祭り、禘では合祭し、嘗では合祭し、烝では合祭する。諸侯は、禘した場合は禘はおこなわず、禘した場合は嘗は

おこなわず、嘗した場合は烝はおこなわず、烝した場合は禘をおこなわない。⁴周の世では、春は祠、夏は禴、秋は嘗、冬は蒸で先王をもてなす。⁵周の「雅」にも言う。「禴し、祠し、烝し、嘗し、ゆきて先王につかふ」と。「易」は殷の末世、周の盛徳のころ作られたので祭祀に関しては「禴」の表記を用いることが多い。つまり「禘」と「禴」は同じものである。飲酒によって言うなら「禘」と称し、奏樂によって言うなら「禴」と称する。つまり飲酒に必ず奏樂を伴うのが先王の儀礼である。「郊特性」に言う。「饗と禴は奏樂を伴い、食と嘗は音楽を用いない。飲酒は陽氣を養うので音楽がある。食事は陰氣を養うので音楽はない」と。⁸飲酒を主とする時に音楽を用いることは推測できよう。

樂は「中声」を根本とし、三孔の簫は先王が「中声」に通じるための楽器である。樂音はすべて「陽」である。よつて「萃」の「升」「既濟」の三卦とも、すべて二爻と五爻で樂音に言及している。しかしながら、「萃」卦の陽は五爻にあり、「升」卦の陽は二爻にある。どこにいても能力を發揮するのである。「萃」の〈六二〉は陰で、〈九五〉の陽が引き立てるのを待つてから「禴」を用いなければならぬ。「升」卦の〈九二〉は陽で、〈六五〉の陰が引き立てるのを待つことなくこれを用いる。それゆえ、「升」卦の〈九二〉は「禴」を用いることを先に述べ、「萃」の〈六二〉が「引吉」の後にそれを述べるのとは異なっているのである。「既濟」の〈九五〉に「東鄰の牛を殺すは、西鄰の禴祭にしかず」とあるので、「禴」の祭祀は〈六二〉を重んじているのであり、「萃」の〈六二〉と同じ主旨である。しかしながら、「既濟」の禴祭は儉約によつて充足を維持するのであり、これこそ「大を有して能く謙なれば必ず豫」であり、樂を用いるにふさわしい時である。成王が「鳧鷖」の詩で先代の功績を維持したこ

とが詠われ、「仮楽」の詩で賞賛された13のは、こういうわけである。

〔注〕

1 『老子』(四十二章)の句。「萬物負陰而抱陽(万物は陰を負ひ陽を抱く)」とある。

2 『禮記』(中庸)による。「誠」は自分自身を完成するだけではない。それによつてすべての物が完成するのである。自己を完成するのは仁の徳であり、物を完成するのは知の徳である。つまり本性の徳なのである(誠者非自成己而已也、所以成物也。成己仁也、成物知也、性之徳也)」とある。

3 『左傳』(隱公三年)による。周と鄭が信賴のあかしとして人質を交換したものの両者の關係が險惡となつた事件を踏まえた「君子」の評である。「苟有明信、澗溪沼沚之毛、蘋蘩蕰藻之菜、筐筥錡釜之器、潢汙行潦之水、可薦於鬼神、可羞於王公(明らかな誠意があるなら、質素な水草や山菜、籠や釜などの什器、水たまりや溝の水でも鬼神に供え、王公に捧げてよい)」とある。

4 『禮記』(王制)による。「春日禘、夏日禘、秋日嘗、冬日烝(春祭は禘、夏祭は禘、秋祭は嘗、冬祭は烝)」「天子犢飢、禘禘、禘嘗、禘烝。諸侯則不禘、禘則不嘗、嘗則不烝、烝則不禘(天子は禘祭で七つの祖廟を個別に祭り、禘では合祭し、禘では合祭し、嘗では合祭し、烝では合祭する。諸侯は禘祭をおこなつた場合は禘祭をせず、禘祭をおこなつた場合は嘗祭をせず、嘗祭をおこなつた場合は烝祭をせず、烝祭をおこなつた場合は禘祭をしない)」とある。

5 『周禮』(春官・大宗伯)による。「以祠春享先王、以禴夏享

先王、以嘗秋享先王、以烝冬享先王(祠祭によつて春に先王をもてなし、禴祭によつて夏に先王をもてなし、嘗祭によつて秋に先王をもてなし、烝祭によつて冬に先王をもてなし)」とある。

6 『詩』「天保」(小雅・鹿鳴之什)の句。「訓義」の引用は現行『毛詩』に同じ。

7 『周易』(繫辭下傳)による。「易之興也、其當殷之末世、周之盛徳邪(易の起源は殷の末、周の徳が隆盛を見せたころに当たるのであろうか)」とある。

8 『禮記』(郊特牲)による。「饗禘有樂而食嘗無樂、陰陽之義也。凡飲養陽氣也、凡食養陰氣也。故春禘而秋嘗。春饗孤子、秋食耆老、其義一也。而食嘗無樂。飲養陽氣也、故有樂。食養陰氣也、故無聲。凡聲陽也(饗と禘は奏樂を伴い、食と嘗に音楽を用いないのは陰陽の原理にもとづく。飲酒は陽氣を養い、食事は陰氣を養う。それゆえ春は禘祭で秋は嘗祭である。春に孤子をもてなし、秋に老人をもてなすのも同じ原理である。しかし食と嘗には音楽はない。飲酒は陽氣を養うので音楽がある。食事は陰氣を養うので音楽はない。楽音は陽である)」とある。

9 「簫」は竹を素材とした笛。『爾雅』(釋樂)に「大簫謂之簫(大簫を産という)」とあり、郭璞の注に「簫如笛、三孔而短小(簫は笛に似ているが三つの指穴で小型)」とある。

10 原文は「中爻」。『易』(繫辭下傳)の「非其中爻不備(其の中爻にあらざれば備はらず)」に対する孔穎達「正義」は、「中爻」を二爻と五爻のこととし、朱熹『周易本義』(卷六)は二爻から五爻までの四爻とする。ここ「訓義」は孔穎達と同じく、二爻と五爻、すなわち内卦・外卦それぞれの中央の爻と

している。

11 『易』(序卦傳)による。「序卦傳」は六十四卦の配列の順序を述べており、ここは「大有」「謙」「豫」の順序を説いた部分である。「有大者不可以盈、故受之以謙、有大而能謙必豫、故受之以豫(多くを持つものは驕つてはならない。よつて「謙」卦がこれに続く。多くを持つていながら謙虚でいることができるれば必ず喜びがある。よつて「豫」卦がこれに続く)」とある。

12 『詩』「鳧鷖」(大雅・生民之什)による。「序」に「鳧鷖、守成也。大平之君子能持盈守成、神祇祖考安樂之也(鳧鷖は功績を維持することを詠う。大平の時の君子が安定を維持し、天地の神々と祖霊が喜び樂しむ)」とある。文王、武王の建国の偉業を成王がよく保つたことを鬼神が喜んだとする。

13 『詩』「假樂」(大雅・生民之什)による。「序」に「假樂、嘉成王也(假樂は成王を称讃する詩)」とある。孔穎達「正義」に「以其能守成功、故於此嘉美之也(興業を維持することができたので、この詩で成王をほめ讃えたのである)」とある。

繫辭

天尊地卑、乾坤定矣。卑高以陳、貴賤位矣。動靜有常、剛柔斷矣。方以類聚、物以羣分、吉凶生矣。在天成象、在地成形、變化見矣。是故剛柔相摩、八卦相盪。鼓之以雷霆、潤之以風雨。日月運行、一寒一暑。乾道成男、坤道成女。

自天尊地卑至在天成象在地成形、此禮者天地之別也。自剛柔

相摩至乾道成男坤道成女、此樂者天地之和也。樂以崇德、禮以廣業。而禮樂由賢者出、故以賢人德業終焉。

〔校勘〕

a 「成形」以下卷末まで、方濬師本は「原闕」。

〔訳〕

天は尊く地は卑しくして乾坤定まる。卑高陳なりて、貴賤位す。動靜常ありて、剛柔斷ず。方は類を以て聚まり、物は羣を以て分れて、吉凶生ず。天に在りては象を成し、地に在りては形を成して、變化見はる。是の故に剛柔相ひ摩し、八卦相ひ盪く。之を鼓するに雷霆を以てし、之を潤すに風雨を以てす。日月運行し、一寒一暑す。乾道は男を成し、坤道は女を成す。

「天は尊く地は卑しく」から「天に在りては象を成し、地に在りては形を成して」までは「礼は天地の別」をいう。¹「剛柔相ひ摩し」から「乾道は男を成し、坤道は女を成す」までは「樂は天地の和」をいう。²樂によつて徳を尊重し、³礼によつて事業を拡大する。しかし礼と樂は賢者より出るものだから、賢人の徳と事業によつて終わる。

〔注〕

1 『禮記』(樂記)による。「天尊地卑、君臣定矣。卑高已陳、貴賤位矣。動靜有常、小大殊矣。方以類聚、物以羣分、則性命不同矣。在天成象、在地成形。如此、則禮者天地之別也」とある。多く「繫辭傳」に一致する。

2 「地氣上齊、天氣下降、陰陽相摩、天地相盪。鼓之以雷霆、

奮之以風雨、動之以四時、煖之以日月、而百化興焉。如此、則樂者天地之和也」とある。多く「繫辭傳」に一致する。

3 『易』（豫）の「象傳」に「先王以作樂崇德、殷薦之上帝、以配祖考」とある。解釈は「訓義」巻第八十二「豫」の条にある。

變而通之、以盡利、鼓之舞之、以盡神。

天下之事、變而通之、以盡利者、禮之禮也。天下之物、鼓之舞之、以盡神者、樂之樂也。

樂書卷第八十三^a

〔校勘〕

a 「樂書卷第八十三」 国会図書館蔵宋刊本「樂書卷第八十三終」、四庫全書本「樂書卷八十三」、方濬師本「樂書卷八十三終」にそれぞれ作る。

〔訳〕

變じて之を通じ、以て利を尽くし、之を鼓し之を舞し、以て神を尽くす。

天下の事について、「變じて之を通じ、以て利を尽」くすのは、「礼の礼」である。天下の物について、「之を鼓し之を舞し、以て神を尽」くすのは、「樂の樂」である。

（樂書卷第八十三）

（二〇一二、五、三二）